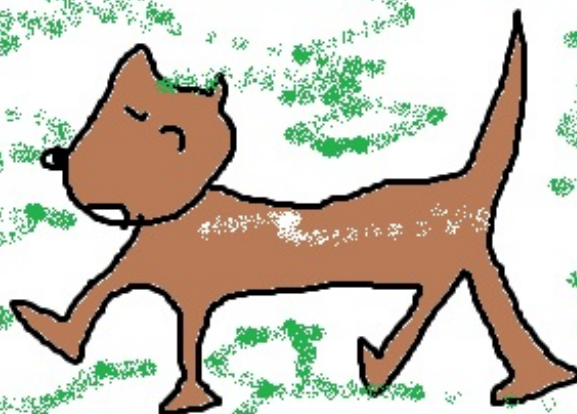
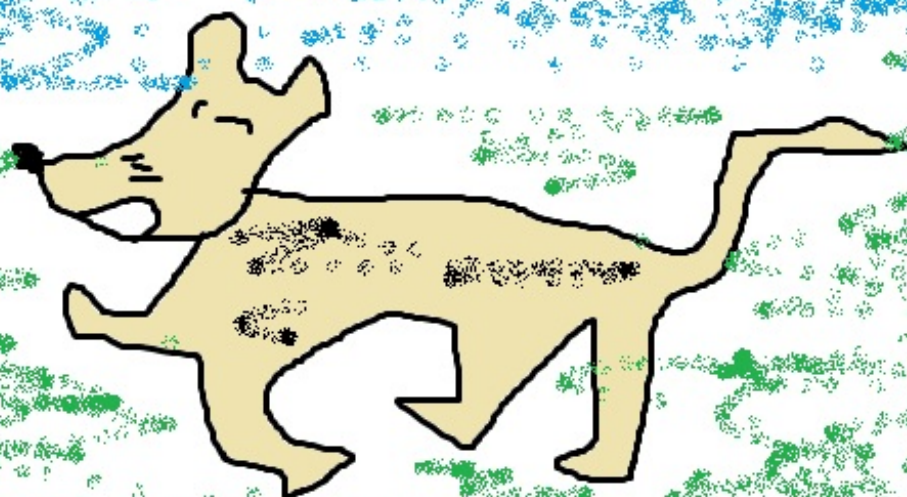
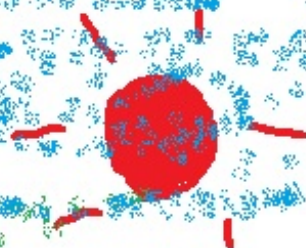


ジルとモモのはなし



幼稚園の年長のころに、僕のウチに犬がきた。兄の友達の家で生まれた犬を引き取ったのだ。母がその犬にジルという名前をつけた。未だに名前の由来は知らない。

利口な犬だった。物覚えが良かった。台風の日に室内に入れておくと、翌朝ククン泣きながらドアの前に座っている。室内で小便してはいけないという教えを守って、僕らが起きてくるまで我慢して待っていたのだ。

僕が小学二年生のとき、ジルが五匹の子犬を産んだ。家から脱走して数日間家をあけた際にどこかの野良犬と交尾したらしかった。五匹のうち四匹は元気だったが、一匹は病気だった。ジルは四匹には乳をやった。しかし病気の子犬は乳をもらう力がない。僕らは牛乳を温め、ストローで子犬に与えた。だがうまく飲めず鼻から牛乳がでてきた。少しでも無理に飲ませて毛布にくるんで寝かせた。

その翌朝。寒い朝だったのをよく覚えている。その子犬は死んでいた。たった一日という短い付き合いだったせいか、それとも僕がまだ幼かったせいか、不思議と悲しみは湧いてこず、ただ庭に埋めた。

元気だった四匹のうち三匹はオス、一匹はメスだった。三匹のオスは無事に引き取り手が見つかったが、メスは引き取り手が見つからなかったので育てることにした。また母が名付け親となり、モモという名前がついた。

モモは臆病者で、ジルと一緒になければ決して家から出ようとはせず、散歩も常に二匹一緒に、一人で散歩させるときには苦勞した。いつも兄と一緒に散歩につれていった。兄がジルのリードを持ち、僕がモモのリードを持つことが多かった。

ジルもモモもどちらも元気で、どちらかが死ぬことなんか考えたこともなくて、この幸せはずっと続くと思った。

しかしいつまでも健康でいられるわけはなく、僕が中3のころにそれは訪れた。

散歩につれていこうと思って犬小屋にいくと、ジルが後ろ足を引かずって前足だけで歩いている。病院に連れていったら、椎間板ヘルニアということが判明した。腰から下が麻痺する病気だ。手術をするか否か、家族で迷った。しかし手術の成功率は0%に近いと医師から言われ、手術を諦め、家族で世話することにした。

腰から下が麻痺しているので、数時間おきに膀胱を絞って小便を出してあげたり、色々大変だった。時には世話が大変だな、と思ったこともあった。犬というやつはそういうことに非常に敏感な動物だ。ジルは自分がいなければ迷惑かけずにすむのに、などと思っていたかもしれない。今思えば可哀そうなことだ。

介護も虚しく、ある日ジルの足にキズができた。床擦れのような小さなキズだった。だが小さな傷でも、下半身が麻痺しているので、下半身のキズに対する自然治癒力も衰えていて、化膿していった。見るに耐えなかったので、僕らは安楽死させる道を選んだ。

最期の日、ジルとモモに最後の面会をさせた。ジルは室内で介護を受け、モモは外で飼ってい

たからだ。犬の第六感というのは凄くて、ジルもモモもこれが最期と分かっていたようだ。二匹ともクンクンと鳴き、舐めあった。

安楽死をさせるため、病院に連れていった。待合室で、僕はジルを膝に乗せて、泣きながら撫でた。ジルも僕の中からずっと目をそらさなかった。注射を打つ前、ジルは震えていた。僕は撫で続けた。

注射を打つと、五秒位でジルは目を閉じた。今思い出しても涙が出る。死体はモモに見られないように庭に埋めた。ジルの写真は今でも持っている。

モモはジルと一緒にないと散歩に行けないので、それからはあまり広くない庭を散歩させた。たまに庭で遊んでやった。

僕は高校を卒業して、大学に進学するために実家を出た。モモとも年に数回しか会わなくなった。

大学二年生の冬のこと。僕は友達二人とカラオケのオールに行っていた。朝方になると体力がもたずに眠った。すると不思議な夢を見た。

夢の中で僕は実家にいた。でかい化け物が現れて町を破壊し、人が逃げ惑っている。僕はモモと一緒に逃げようとした。しかしモモは決して外れない鎖に繋がれている。僕は必死に外そうとした。化け物はもうそこまで来ている。

そのときモモは「私のことは気にせず逃げてください」と喋った。僕は涙をのんで逃げた。悲しみで、そこで目が覚めた。時計を見ると朝五時だった。

その日の朝九時ごろ、母から電話があった。母は「朝見たら、モモが死んでたよ」と言った。僕は「ああ、多分それ朝五時くらいに死んだんだよ。俺には分かる」と言った。夢の中での化け物は「死」を意味し、外れない鎖は「逃れられない」を意味し、つまりあの夢はモモが「逃れられない死」を迎えたことを、死の直後に魂になって僕に教えてくれたに違いない。

モモはもうかなりの高齢で、いつ死んでもおかしくなかった。しかし死の数日前、成人式に出席するために帰郷して、僕はモモに会うことができた。モモは僕のことを待っていてくれたのだろう。

このような悲しいことはあったが、それ以上に楽しかった思い出やありがたさがある。二匹のことを思い出すとき、優しい気持ちになれる。死後、魂というのはその人(ペット)のことを一番思っている人のもとに行くという。今も二匹は僕のそばにいる。